

# 老年観に関する研究 —その1—\*

— 近代日本短編小説にみる高齢者像 —

浅 野 仁\*\*

## 課題と目的

人口に占める高齢者の絶対的、相対的増大による超高齢化社会の到来を迎え、長期にわたる高齢期の生き方、あるいは老いの生き様を吟味することは、高齢者は言うに及ばず、社会にとってもますます重要な課題となっている。この課題を検討するためのひとつの切り口は、高齢者の意識や生活行動、ひいてはその生き方に大きな影響を及ぼす高齢者世代以外の人々の抱く老年観、高齢者像にあると考える。

そこで先ず、社会老年学の領域において上述の問題意識から執筆された2, 3の老年観に関する先行研究をレビューしたい。

副田義也の論文「現代日本における老年観」は、歴史の変遷を踏まえて社会から働きかけられ

つつ生きる「社会の主体」と社会に働きかけつつ生きる老年である「社会の主体」に分類して、わが国の老年観について記述している<sup>(1)</sup>。その内容を要約して、副田は以下の表を掲げている。

筆者が本稿を執筆するに当たって参考にした知見を記述すれば、まず老年観を1950年代以前と1960年代以降に分けて検討していることである。その根拠は国民皆保険を機軸とした社会保障制度が1960年代から整備されてきたことであると指摘しているが、筆者が目にした記述内容は「60年代以降でも50年代までの老年観はさまざまな形で残っている。この50年代までの時期では主要には明治期から、いわゆる戦前期、戦中期、さらには徳川期やさらにそれ以前の時期の老年観が継承されている例も少なくない」と述べていることである<sup>(2)</sup>。つまり、現代にみる老年観は過去からのそれが集積されたものと理解することができる。

表1 現代日本人の老年観

	社会の客体	社会の主体
五〇年代以前	隠居制度（老衰者、引退者、親族による被扶養者、敬愛の対象。経験知などによる尊敬の対象） 孝の思想、敬老思想 貧困老人（労働者の老後）	賢者としての老年、「枯れた」老年＝「タテマエ」 愚者としての老年、子どもに返った老年＝「ホンネ」
六〇年代以降	老年人口（かつての生産年齢人口、生産年齢人口による社会的扶養の対象、生産年齢人口の負荷） 従属人口（年少人口と一括される） 敬老思想（実績主義にもとづく）＝「タテマエ」 社会的弱者（能力主義にもとづく）＝「ホンネ」 老年への蔑視（醜い老年、無力な老年）、老年への無関心＝「ホンネ」	権利主体としての老年（生存権の主体） 活動主体としての老年（余暇、リハビリテーション、労働、学習、スポーツ、社会運動の主体） 成熟主体としての老年（人間性、人間関係の洞察の主体、老い、病い、死の受容の主体）

出典：副田義也「4 現代日本における老年観」、伊東光晴他編集『老いの発見・2 老いのパラダイム』、岩波書店、1986年、109ページ。

\*キーワード：老年観、近代日本短編小説、高齢者像、老いの生き様

\*\*関西学院大学社会学部教授

筆者が参考にしたもうひとつの知見は「タテマエ」と「ホンネ」の区分による記述内容である。「社会の客体」と「社会の主体」における「タテマエ」は、それぞれ「敬老思想」であり、「賢者としての老年」であるのに対して、「ホンネ」はそれぞれ「老年への蔑視」であり、「愚者としての老年」と指摘しているが、「タテマエ」と「ホンネ」の区分は老年観を検討する上で重要な視点であろう。

次に、保坂久美子らが調査研究をした「大学生の老人観」を紹介しよう<sup>(3)</sup>。この研究の目的は、大学生の高齢者に抱くイメージを明らかにして、それらのイメージがいかなる要因によって規定されているかを検討することである。調査研究結果によれば、大学生の抱く高齢者に対するイメージは「保守的」、「地味な」、「暇そう」、「遅い」、「灰色」、「受動的」、「弱い」、「小さい」、「非生産的」、「鈍い」、「強情な」といった高齢者に対する否定的なイメージが多いのに対して、「暖かい」、「静かな」、「賢い」、「優しい」といった肯定的なイメージは否定的なそれに比してはるかに少ないと報告している。

また、それらのイメージを規定する要因として、個人レベルでは「祖父母との交流」や「日常的高齢者との接触」、また社会レベルでは「老人問題教育」や「マスコミの報道」を指摘している。さらに、この研究では大学生の否定的イメージを払拭するためのいくつかの提言をしている。

さらに、前述の副田義也の論文に依拠しつつ、高齢者福祉に関連する法律の理念と老年観の関連性を述べた論文に副田あけみの「高齢者福祉の思想」がある<sup>(4)</sup>。その具体的な内容は、老人福祉法の理念である「実績的敬老思想」、「反エイジズム」、介護保険法の理念である「自立支援」が高齢者の生活にいかなる意味があるのかという視点から批判的に記述している。

たとえば、老人福祉法の理念である「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として、かつ、豊富な知識と経験を有する者として敬愛されるとともに、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする」の内容は、実績主義の条件を付与していることに問題があると指摘している。また、介護保険法では「介護サー

ビスを必要とする状態になった場合でも、持てる能力の維持・回復を目指し、その心身の状況や生活環境に応じてサービスを自ら選んで受けながら、できるだけ自立した生活を送ること」をその理念としているが、現実の制度上の制約や主として家族がサービスを選択している状況からレトリックに過ぎないと述べている。さらに、「こうした自立の強調が自己責任の強調にすり替わり、社会政策が最低限のセーフティネットを張るだけに縮小していく恐れ」についての危機感も記述している<sup>(5)</sup>。

以上、社会老年学の分野からの先行研究の概略を紹介したが、本研究では、これらの先行研究を参考にして、「高齢者を主人公にしている近代日本の短編小説」を素材にし、感性豊かな小説家の描く老年観、高齢者像を分析し、現在及び将来の高齢期や老いの生き方の糸口を見出すことを目的としている。

## 研究対象と方法

まず、老年観の研究にいかなる理由で小説を題材にしたかの説明が必要であろう。

高齢期の生き方に以前から関心を持っていた筆者は、先に記したように社会一般の老年観が高齢者の生き方に多大の影響を及ぼす、と考えていた。たまたま読んだ高齢者を主人公とした数編の短編小説を通して、小説家が描くフィクションの世界ではあるが、小説家の抱く老年観、老人像が現代の高齢者の生き方に参考になることを見出した。なお、近代日本の短編小説に限定したのは時代の背景を特定するためである。

さらに、高齢者を主人公にした小説と言えば、谷崎潤一郎の「楓癩老人日記」(昭和37年)、有吉佐和子「恍惚の人」(昭和57年)、そして伊藤整の「変容」などの長編小説が知られている。さらに最近では、丸山健二の「鉛のバラ」(2004年)や古井由吉の「野川」(2004年)が刊行されているが、作業の準備の都合でこれらの長編小説は今回の分析対象としたい。なお、今回対象にした短編小説は東京都立図書館のリファレンス・サービスを利用して収集した。

以下に、研究対象にした近代日本短編小説を発

表年の古いものから掲げる。

研究方法は、表2に掲げた高齢者を主人公にした短編小説を素材にして、それぞれの小説が扱う主題(テーマ)を抽出する作業を行い、高齢者像について吟味することにした。なお、その際には小説の主人公が生きた時代背景についても重視した。

### 小説家の描く高齢者像の主題

14編のそれぞれの小説の主題を分類してみると、1編における小説家の描く高齢者像の主題は必ずしもひとつではないことが明らかになった。つまり、それぞれの小説の中にはいくつかの高齢者像に関するテーマが含まれている。また、読み手の人生のその時々によりさまざまな解釈が可能でもある。したがって、ここでは筆者が作品の主題と解釈した内容で分類した。

### 1. 家族愛(夫婦・親子)

老夫婦や親子の愛情を小説の主題にしている小説には、水上勉の「棺」、梅崎春生「輪唱」、深沢七郎の「檜山節考」がある。水上の「棺」では、山峡の貧しい農業を営む老夫婦の生活を描きながら、息子の戦死と夫の死別のために老妻は生きていく糧を失い、息子の位牌を抱いて自死する小説である。水上は「夫婦は仲のええ家じゃったけに——あの世でまた、一緒に暮らそうと思うて——」と村人に語らせている家族愛を主題とした作品である。

梅崎の「輪唱」は、仏師であった夫が生計を立てるために日々モク拾いをしている戦争直後の老夫婦の生活を描いている小説である。小説の主題は、数年来ほとんど口を利きあっていない老夫婦であるが、小説のいくつかの出来事から解釈して老夫婦の関係は必ずしもマイナスの人間関係では

表2 参考にした近代日本短編小説

1. 志賀直哉「老人」、『志賀直哉全集 第1巻』、岩波書店、1955年。  
発表年：明治44(1911)年。
2. 芥川龍之介「老年」、『芥川龍之介全集 第1巻』、筑摩書房、1971年。  
発表年：大正14(1925)年。
3. 小島政二郎「鷺の踏切」、『日本短編文学全集 23』、筑摩書房、1972年。  
発表年：昭和12(1937)年。
4. 中山義秀「厚物咲」、『現代日本文学大系 40』、筑摩書房、1968年。  
発表年：昭和13(1938)年。
5. 梅崎春生「輪唱」、『現代日本文学大系 86』、筑摩書房、1968年。  
発表年：昭和23(1948)年。
6. 永井龍男「朝霧」、『現代日本文学大系 85』、筑摩書房、1968年。  
発表年：昭和24(1949)年。
7. 三島由紀夫「怪物」、『現代日本文学大系 17』、筑摩書房、1967年。  
発表年：昭和24(1949)年。
8. 宮地嘉六「老残」、『現代日本文学全集 88』、筑摩書房、1968年。  
発表年：昭和27(1952)年。
9. 井上靖「姥捨」、『日本文学全集』、河出書房、1969年。  
発表年：昭和30(1955)年。
10. 深沢七郎「檜山節考」、『新潮文庫』、新潮社、1964年。  
発表年：昭和31(1956)年。
11. 曾野綾子「火と夕陽」、『現代日本文学大系 45』、筑摩書房、1965年。  
発表年：昭和32(1957)年。
12. 大江健三郎「敬老週間」、『日本短編文学全集 16』、筑摩書房、1968年。  
発表年：昭和38(1963)年。
13. 永井龍男「青梅雨」、『現代日本文学大系 86』、筑摩書房、1969年。  
発表年：昭和40(1965)年。
14. 水上勉「棺」、『現代日本文学大系 38』、筑摩書房、1968年。  
発表年：昭和42(1967)年。

なく、長年連れ添った夫婦の間には隔絶した平安とも言うべき関係があるのではないかと伺わせるものがある。

深沢の「楢山節考」は、その内容の説明を必要としない周知の小説であるが、民間伝承の棄老伝説を題材として、自ら進んで棄てられることを願う母親と妻とともにできればいつまでも家で生活して欲しい息子が村の掟に従って母親を楢山に棄てていく物語である。この小説の主人公である「おりん」に焦点を合わせれば、極貧生活、棄老の意味などいろいろな解釈が可能であるが、筆者はこの小説から親子間の深い愛情が作者のテーマではないかと考えた。

## 2. 性・恋愛感情

高齢者の性、恋愛感情を高齢者像のテーマにしている小説も少なくない。志賀直哉の「老人」、芥川龍之介「老年」、曾野綾子の「火と夕陽」がそれである。

志賀の「老人」は、54歳で妻を亡くした主人公が若い後妻を娶ったことにより、昔の実業家として再び活躍するが、69歳の時にその妻と死別する。その後芸者を落籍して妾とするが、妾は若い男との間に子どもを産む。主人公は腹を立てる勇氣も女を怨むことさえ出来ず、もう1年の同居生活とともに死をも願ひ出る。主人公は望みどおり妾や孫、子に囲まれて75歳で永眠することで小説は終わる。小説の中の「女の関節の所だけが少し凹んでいるふっくらとした柔らかい手の前に自分の皮の下の肉の去ったかさかさした手を出すことが出来なかった。——なぜ、他の老人のように自分の心も老人らしくなってくれぬだろうか」と悲しんだ」という描写は、高齢期の性の一面を指摘している。

芥川の「老年」では、戦前の茶式料理店を舞台にして主人公の「房さん」が待合いの女性とひそかに一時の逢瀬を楽しむことを主題としている。その光景を窓越しに見つけた遊び仲間の友達が「歳をとっても、隅へはおけませんや」とひそひそと話す。若い時の色事を老いて懐かしみ、老いても性は死なず、といったことを文字どおり短い小説において芥川は高齢者像の主題にしていると解釈した。

曾野の短編小説「火と夕陽」は、若いときからの恋が老いらくの恋となって、美しくもはかなく描かれている。夕陽の輝く丘の上で愛する人を茶毘に付す光景は恋愛感情の深さを印象付けている作品である。

## 3. 棄老

棄老を高齢者像のテーマにしている小説には井上靖の「姥捨」や先に記述した深沢の「楢山節考」がある。高齢者に対する社会的対応は歴史的にみて「棄老」—[隠居]—[優老]の流れがあると説明する人がいる。棄老という用語は少なくとも現代においては死語であっても、ホンネのところでは存在していることは否定できない。

井上の「姥捨」は、私小説であるが、少年時代の姥捨てに対する恐ろしい思い出を基にして、自分の母が自ら棄てられることを望んでいるのではないかと母の生き方を観察している。そして、世の中の一切の煩わしいことから離れ、自発的に世捨て人になることを願う高齢者の生き方のあることを肯定する内容を小説のテーマとしている。

深沢の「楢山節考」は、別の主題の解釈をすれば、主人公のおりんは自分の住む家や村が食物にも事欠く極貧の故に自ら棄てられることを望む気丈な女性である。読者にとってはおりんの生き様は壮絶であると感じ入るであろうが、本人にとっては得心のいく生き様と考えている、と作者は捉えているのではないかと考えた。

## 4. 心理・性格特性

高齢者の心理・性格特性をテーマにして高齢者像を描いている小説も何編かある。中山義秀の「厚物咲」、永井龍男の「朝霧」と「青梅雨」、三島由紀夫の「怪物」、そして大江健三郎の「敬老週間」がそれに該当する。

中山の「厚物咲」では、利己的な男と愛他的な男の一生を対比して描いている。主人公である利己的な男は養子先の酒問屋を継ぐが、中年期になって全てを失い後添いの女性もなく、世間の非難を受けながら生活をする。高齢期になって、60年間の交流のあった愛他的な友人のところに入りする女性を見染め、一緒になることを望み、この願いが叶わなければ死ぬと伝えるが女性を受け

入れないことで自死する。この男の死を知り、愛他的な友人は主人公を片意地を張る「律儀」な利己的な人間と断言し、高齢期の心理・性格特性を小説のテーマとしている。

永井の「朝霧」では、教師を退職した70歳前半の主人公は軽い認知症を患っているが、過去の思い出に執着するさまざまな生活の出来事を描いている。認知症の主人公の言動から「生への執着」を読取ることができる。また、「青梅雨」は、事業の失敗のために一家心中をする物語であるが、「世間の人たちには、私はちっとも恥を感じない。できるだけ、迷惑を掛けまいとして八方手を尽くした」と死の直前に満足げに主人公は語っているが、永井はそれは主人公の「律儀」がなせることと結論付けている。

三島の「怪物」は小説の主題を見出すための解釈が難しい作品である。子爵である松平斎茂の少年時代から死に至る一生を描いている。主人公の斎茂は少年時代から残虐非道を好み、相手の悲しみや嘆く姿を見て喜びを感じる生涯を送ってきた。晩年になって脳卒中のために寝たきりとなり、少年時代にぬれぎぬを着せて父親から堪当された友人の家に身を寄せ、再婚の子どもの看病を受ける。しかし、2人が恋愛関係であることを知り、看病をしている娘の顔をローソクで焼き、悦に入っている矢先に2人は思いがけず結婚することになり、失意のどん底を味わいながら寂しく息を引き取る。高齢者の心理・性格特性のテーマとして解釈することが適切であるかどうか確言はできないが、作者は斎茂の性格を通して「因果応報」も小説のテーマとしている、と解釈した。

大江健三郎の「敬老週間」の小説は「老人福祉法」が制定された年に発表された作品である。主人公の高齢者をして政治や社会の問題を語らせているが、小説のテーマに高齢者の心理特性のひとつと言われる猜疑心を伺うことができる。

## 5. 孤独

老人像の主題として「孤独」に焦点を当てた小説は多い。興膳 宏は「孟子」の用例から孤独の語源を次のように説明している<sup>(6)</sup>。

『「老いて子なきを独といい、幼くして父なきを孤という』という有名な用例がある。『孤』と

はみなしご、『独』とは子どものいない年寄りである。『「孤独』が『心の孤独』を意味するのは近代語の用法である』。これに従えば、子どものない高齢者や現在意味する心の状態である「孤独」を小説の主なテーマにしている作品は少なくない。

それには、小島政二郎の「鷺の踏切」、宮地嘉六の「老残」がある。

小島の「鷺の踏切」では、実業家として成功し、子どもも12人と恵まれていた主人公が事業に失敗し、子どもも亡くし60歳前から踏切番の仕事をするようになるが、喘息の持病があり、残された1人の子どもに先立たれ、60歳の年齢で人員整理のため失業する。疾病、貧困、子どもの死のために人生に失望し、自殺する。この小説では、自殺の背景としていくつかの理由をあげられるが、小説の底流にあるものは孤独である。

宮地の「老残」は、終戦直後の貧しい生活において一生を振り返りながら悔恨の生涯に慟哭している作品である。人生の運、不運は偶然によって左右されることをテーマとしながら、高齢期の孤独をテーマにしている。

## 総括

これまでに、小説家が描写した高齢者像の主題を筆者の解釈により5つに分類して記述したが、筆者が分析の礎としたことは冒頭に紹介した三つの先行研究である。つまり、高齢者像のテーマのキーワードは、歴史的流れの中の「時代背景」と「タテマエ」と「ホンネ」、高齢者に対する「否定的・肯定的イメージ」、そして行政が高齢者に期待する「自立」を含めた「活力ある高齢者像」である。

最後に、14編の短編小説に共通する高齢者像を総括しておきたい。

### 1. 高齢期はそれまでの人生の集積

いずれの小説も主人公の死をもって作品は完結するが、大方の小説は主人公の一生を語る手法がとられている。つまり、死そのものが主人公にとって納得のいくものであるのか、または無念の死であるのかは、それまで歩んできた人生に拠ることが大きいことを小説のテーマにしている。

エリクソンはライフサイクルの発達段階に関する

表3 「高齢者が抱える問題」に対するイメージと実態

(%)

問題	回答	18～64歳	65歳以上
		高齢者が抱える問題としてイメージした人の割合	実際に経験した人の割合
犯罪に巻き込まれやすい		71	37
生活資金に困っている		64	12
孤独		61	6
自分の存在意義を見出せない		57	8
高齢者に対する医療が不十分である		61	11
不健康		57	15
働く場所がない		47	5
移動手段がない		45	4
住環境が粗末である		38	3

出典：ロバート・C・アッチェリー他著・宮内康二編訳「ジェロントロジー・加齢の価値と社会の力学」、きんざい、平成17年、35ページ。

る著作の中で、人生の最後の段階である高齢期について「老年期における支配的な対立命題及び最後の危機のテーマは、統合対絶望である。——つまり人生行路の最後に示されている（絶望という）失調要素のほうがまず頭に入ってくるが、しかし統合は、この最後の対立命題から熟して生まれるという我々が仮定する人間的強さが要請するものと同じもの、つまり英知というひとつの特質を要請するように思われる」と述べている<sup>(7)</sup>。出生から最後のライフステージである高齢期を継続したものとして捉える理論は、短編小説のテーマと共通するものがある。14編の小説を通読して改めて高齢期の生き様はそれまでの人生の集積であることを痛感した。

## 2. 主人公が生きた時代背景

今回対象にした小説の主人公が生きた時代は大正、昭和（1912－1955年）と長い年月にわたるが、とりわけ戦前と戦争直後（1940－1955年）の作品がほとんどである。副田義也の歴史区分に拠れば、1950年代以前の社会保障制度が未整備の時代に生きた高齢者である。

さらに、高齢期の三大生活苦であると言われる貧、病、孤に対応する所得保障、医療保障、社会福祉が不十分な社会状況に生きた主人公の生活は現在では想像すらできない。このような社会状況において書かれた小説の高齢者像の主題が生活苦

を小説の題材にすることは避けられない。

## 3. 高齢者に対する誤解と偏見

高齢者に対するイメージが実際とは異なる否定的な内容であることはしばしば指摘されていることである。上に掲げる表はアメリカの状況であるが、大変興味深い。

上表は、青壮年世代が「高齢者が抱える問題としてイメージした比率」と65歳以上の高齢者が「実際に経験した人の比率」を対照させた内容である。

高齢者の貧、病、孤のみならず、そのおかれている社会的条件についても不利なイメージを青壮年世代は抱いている。先行研究に見られた大学生のイメージが肯定的イメージに比して否定的イメージが多いと説明されていたが、文化の差異があるアメリカにおいてもそれを裏付けるものである。これは誤解による偏見と言えよう。「偏見とは、特定の集団に属する全ての人に否定的な印象を当てはめる非好意的な態度」を意味しているが、本表はまさしく年齢による偏見である<sup>(8)</sup>。

## 4. 国が期待する現代の高齢者像

平成13（2001）年に閣議決定され、提言された「高齢社会対策大綱」において、「旧来の高齢者像の見直し」と題して、以下のような提案がなされている<sup>(9)</sup>。

「高齢者は、全体としてみると健康で活動的であり、経済的にも豊かになっている。他方、高齢者の姿や状況は、性別、健康状態、経済力、家族構成、住居その他に応じてひとくくりに論じることではできない。このような高齢者の実態を踏まえ、健康面でも経済面でも恵まれないと言う旧来の高齢者像にとらわれることなく、施策の展開を図る」と。

また、「厚生労働白書 平成15年版-『活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築』-」においても、「高齢社会対策大綱」の提言を発展させた提言をしている。「定年や末子結婚後のいわゆる『老後』の期間は新しい世代になるほど長くなっており、65歳時の平均寿命も2001（平成13）年時点では男性は17.7歳、女性は22.7歳となっている。このような長い期間を単に『余生』として過ごすのではなく、いわば『第2の現役期』として生きがいを持って過ごすことが可能となるような社会が求められている。さらに、そのような取組みは、これからの高齢社会を明るく活力のあるものとしていくためにも、社会や地域に積極的に貢献することを可能とする観点からも非常に重要である」<sup>(10)</sup>。

上に紹介したように、現代においては高齢者を社会に貢献できる存在として期待されるまでに至っている。

## 5. 結語

カトラーは「対象者観は知識、ステレオタイプのような概念とは区別すべきである。つまり、対象者観とは対象者に対する評価であり、具体的には対象者に対する賛否の意向とか好悪を意味している。それに対して、知識は対象者についての評価というよりも認識であり、また、ステレオタイプは事実を誤って認識していることを意味している」と述べている<sup>(11)</sup>。

この引用内容に依拠すれば、本稿は近代日本短編小説が描く高齢者像を特定するなかで、現代における老年観を検討し、さらに高齢期の生き方について考察している。

さいごに、これまでの作業におけるひとまずの結論を以下に記述しよう。

それぞれの小説のなかで生きた高齢者の時代

は、現在の高齢化率20%と異なり、5%に過ぎず、人口構成からみてもマイノリティである。さらに、社会保障、社会福祉の制度が未整備の時代でもある。したがって、その生活も現在の高齢者のそれとは状況が大いに異なるものであった。それにもかかわらず、小説家が描く当時の高齢者の生き様から現在の高齢者の生き方に参考になる事柄が多くみられた。たとえば、小説家が高齢者像として描く「家族愛」、「性」、「孤独」などは現在でも通用することであり、さらに小説の行間から読取った「老年期はそれまでの人生の集積」はこれからの高齢期の生き方に示唆を与えてくれた。

また、老年観に関連して、高齢者に対する意識も時代を超えて存在する。たとえば、老人ホームの利用について現代の娯楽山と潜在的に感じる人は少なくないし、依然として実際と相違してネガティブな老年観を持つ人も多い。

これらの課題を解決するひとつの方策として、高齢者自身の「役割」として筆者が好んで紹介する1節を最後に付記しておきたい<sup>(12)</sup>。

「高齢者の役割というのは、その人生を見事に演じたときである。その特徴となるのは、静謐、知恵、自由、威厳、そしてユーモアのセンスである。とりわけ、知恵については高齢者の最も賞賛されることの多い特性のひとつである。そして、高齢者において最も価値ある知恵はほかならぬ老後に関するものである。いろいろな障害があるにもかかわらず、人生を本当に楽しんでいるなら、自分はその老後に関しての権威だと思ってよい。みんながあなたの秘訣を習いにやってくるだろう」

## 参考・引用文献

- (1) 副田義也「4 現代日本における老年観」、伊東光晴編集『老いの発見 2. 老いのパラダイム』、岩波書店、1986年。
- (2) 副田義也「前掲書」、86ページ。
- (3) 保坂久美子他「大学生の老人観」、『老年社会科学 Volume 8』、日本老年社会科学会、1986年、103-115ページ。
- (4) 副田あけみ「高齢者福祉の思想」、小笠原祐次他編『高齢者福祉論』、有斐閣、2005年。
- (5) 副田あけみ「前掲書」、71ページ。
- (6) 興膳宏「漢字コトバ散策」、日本経済新聞朝刊、2005年6月5日。

- (7) E・H・エリクソン著、村瀬孝雄他訳「ライフサイクル、その完結」、みすず書房、1991年、79ページ。
- (8) アッチェリー・R・C・他著・宮内康二編訳「ジェロントロジー—加齢の価値と社会の力学—」、きんざい、平成17年、35ページ。
- (9) 閣議決定「高齢社会対策大綱」、平成12年。
- (10) 厚生労働省監修「厚生労働白書（平成15年版）」、平成15年、37ページ。
- (11) S. J. Cutler, Attitudes, G. L. Maddox Editor-in-Chief (1987) The Encyclopedia of Aging, Springer Publishing Co., p. 43.
- (12) B・F・スキナー他著、本明寛訳「楽しく見事に年齢（とし）をとる法」、ダイヤモンド社、1984年、177-178ページ。

## Attitudes of Novelists Toward Aging (1) — Focusing on Modern Japanese Short Stories —

### ABSTRACT

This paper examines the attitudes of novelists and the images in their works of older persons, based on fourteen modern Japanese short stories.

Major findings are as follows;

- 1 . Attitudes and images specific to older people and old age as a stage of life vary by time, place, and source.
- 2 . Novelists describe older persons as undergoing substantial stress in later life from economic loss, chronic illness, and isolation.
- 3 . Negative attitude about aging and the elderly are still commonly widespread.
- 4 . At present the government seeks to promote a new image of the elderly, pointing out that many elderly persons are healthy and actively participate in society; it is important to breakdown existing stereotypes.
- 5 . To support a more positive attitude toward older persons, Skinner notes that the wisdom that is valued most in older people concerns old age itself. *If you are really enjoying your life you may find yourself an authority. People will come to you to learn your secret.*

**Key Words:** Aging, Attitudes and Image, Modern Japanese Short Stories, Later Life